

1950年代に活躍した英国人著述家 マージェリー・フィッシュによる庭園の語りから試みる ホームとジェンダーをめぐる庭園の文化地理学

Margery Fish and her narratives on Modern Cottage Gardens in post war England: home, gender and cultural geographies of gardens

橘 セ ツ

キーワード：マージェリー・フィッシュ (1892-1969)、『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956)、コテージ・ガーデン・スタイル、ライフヒストリー／ライフジオグラフィー、ホーム、ジェンダー

Key Words: Margery Fish (1892-1969), *We made a garden* (1956), cottage garden style, life history/life geography, home, gender

要 旨

マージェリー・フィッシュ Margery Fish (1892-1969) は、20世紀後半の英国のガーデニング界に大きな影響を与えた庭園著述家のひとりである (Chivers and Woloszynska, 1990など)。マージェリーと夫ウォルター・フィッシュは、1937年に英国南部サマーセット州の村にあるイースト・ラムブロック・マナー East Lambrook Manor に移り住み、その敷地で庭園をつくりはじめた。その過程をマージェリーが『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956) に語った。本稿では、彼女のホームのガーデニングの思想が、夫ウォルターとの生活の中で、どのようにして生まれ、実践され、醸成されたのかについて『私たちは庭を造った』(1956)をはじめとする8冊の著作と彼女のホームでありガーデニングの実践の場であったイースト・ラムブロック・マナー庭園の風景から考察した。彼女は『手間のかからないガーデニング *Carefree Gardening*』(1966) という手法を提唱して、ガーデニングをできるだけ手軽に行いたい世代の人々の心をつかみ、現代のコテージ・ガーデン・スタイルを再創造した。

I. はじめに

マージェリー・フィッシュ Margery Fish (1892-1969) は、20世紀後半の英国のガーデニング界に大きな影響を与えた庭園著述家のひとりに数えられている (Chivers and Woloszynska, 1990など)。近現代英国のガーデニングの流れを見渡し、先駆的女性たちの活躍について論じたハイディ・ハウクロフト Heidi Howcroft は『黎明期の女性たちによるガーデニング：開拓者、デザイナー、夢見る人 *First Ladies of Gardening: Pioneers, Designers and Dreamers*』において「今から40年ほど前にはマージェリー・フィッシュの名前がガーデニングに関して話題になった時には、それ以上何も説明はいらなかった……ガーデニング好きの人びとは、当時であれば彼女の著作

を本棚やベッドサイドのテーブルに少なくとも1冊は持っていたはずである」(Howcroft, 2014: 49) と当時の彼女の人気と著作がいかに広く一般に浸透していたのかについて述べている。

彼女が提唱するガーデニングは、まずプロの庭園デザイナーや庭師を雇わなくても、家に住んでいる人が主役となってその家で生活しながら自らの手で実践できるホームのガーデニングであった。彼女はプロフェッショナルな庭園デザイナーではなく、庭園を愛好する勤勉なアマチュア・ガーデナーとして庭園とともに生活するライフスタイルの実践の中で得た知見について著作で語った。彼女の語り口は「驚くほど率直」(Horwood, 2010) で、彼女の著作には、読者が自分の庭園でも応用することのできるアイデアや読み物として共感できるようなエピソードに満ちていた。

庭園史の観点から考察すると、彼女の最大の功績は、19世紀の後半の庭園著述家ウィリアム・ロビンソン (1838-1935) が提唱したような『ワイルド・ガーデン *Wild Garden*』(1870) やコテージ・ガーデンの植栽スタイルを1950年代の時代潮流にあった形態に再創造し、わかりやすく語ったことだと考えられている (Horwood, 2010; Clark, 2000 (初版は1989) など)。ロビンソンの言うワイルド・ガーデンやコテージ・ガーデンのスタイルとは、19世紀以降移入された見栄えのする多様な外来種をたくみに生かしながら、その土地の環境に寄り添う自然風な植栽を目指し、あまり人工的な手間をかけすぎずに実践するガーデニングであった (橋, 2009など)。彼女のコテージ・ガーデン・スタイルは、彼女の庭園のあるサマーセットの土地の土壌や気候などの環境に合った多様な植物への探究心と実践による豊富な知識に支えられていた。彼女は英国のコテージ・ガーデンに古くから植えられてきたスノードロップ、クロッカス、スイセン、ヒヤシンス、チューリップ、キンポウゲ *buttercup*、アネモネ、アウリクラ、カーネーション、デイジー、ナデシコ、ツリガネソウ、花の咲くハーブ類などの素朴な花々を愛し、今は流行遅れとなり廃れてしまいあまり植えられなくなった花々の品種をも見直し栽培した (Fish, 1958, 1961など)。彼女は、ガーデニングには多くの時間を使い勤勉にとりくむ一方で、ある種の宿根草は植えっぱなしでこぼれ種による自家播種によって増殖させることにより自然風なインフォーマルな植栽をつくりだす『手間のかからないガーデニング *Carefree Gardening*』(1966) という手法を提唱して、ガーデニングをできるだけ手軽に行いたい世代の現代人の心をつかみ、コテージ・ガーデン・スタイルを再創造した。

英国の新聞ガーディアン *Guardian* 誌に掲載された最近 (2015年) のガーデニング探訪の記事でも「マージェリー・フィッシュは1950から60年代のコテージ・ガーデン・スタイルの長老。サマーセット州にある彼女の庭園は、彼女の提唱する手間のかからないスタイルのガーデニングの証 (遺言) として現在も佇んでいる。‘Margery Fish was the doyenne of cottage garden style in the 1950s and 60s. Her garden in Somerset remains as a testament to her carefree style of gardening.’」(Cable, 2015) という見出しで彼女の功績を讃えている。

本稿では、彼女のホームのガーデニングの思想が、彼女が家族と生活する中で、どのようにして生まれ、実践され、醸成されたのかについて『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956) をはじめとする8冊の著作と彼女のホームでありガーデニングの実践の場であった英国南部サ

マーセット州の村にあるイースト・ラムブロック・マナー East Lambrook Manor 庭園の風景もあわせて考察する。

II. マージェリー・フィッシュのライフヒストリーと『私たちは庭を造った *We made a garden*』 (1956)

マージェリーの独身時代のキャリア

マージェリーは、1892年に、当時はロンドン郊外に位置する Stamford Hill に4人姉妹の2番目の子として生まれた。父 Earnest Townshend は、紅茶を扱う商人であり、マージェリーは中産階級の子供として子供時代を過ごし教育を受けた。マージェリーは、エセックス州にあるクウェーカー教系の学校 Friends School Saffron Walden に通った。Townshend の姉妹の優秀さと活発さは有名であり、学業でも素晴らしかった。その後、マージェリーは、秘書になるためにロンドンの Chancery Lane にあるカレッジ Clark's に進み、優秀なリファレンスを携えて、初めは、出版社 Country Gentleman's Publishing Company の編集者の秘書となった。その後、新聞社の Daily Mail に入社した。マージェリーは、新聞業界で秘書として20年間勤めた。20年間の秘書生活で、特筆されるキャリアは、第一次世界大戦中の1916年に新聞業界の大物 Lord Northcliffe に請われて戦時のミッションにアメリカ合衆国へスタッフの一員（秘書）として同行したことであった (Cooke, 2013; Chivers and Woloszynska, 1990など)。

マージェリーとウォルター・フィッシュの結婚とイースト・ラムブロック・マナーでのガーデニング

マージェリーがウォルター・フィッシュ (1874-1947) と結婚したのは1933年で、マージェリーは41歳の時であった。ウォルターは新聞社デイリー・メールの編集長の時、マージェリーは秘書を務めていた。しかしながら、彼らが、結婚したのは、ウォルターの退職後しばらくしてからであった。ウォルターは、再婚であって、亡き前妻との間にはすでに成人している娘が2人いた。彼らは結婚生活の初めの2年間は、ロンドンのケンジントンに住まいを定めた。ウォルターは、新聞社デイリー・メール編集長からは退職していたが、引き続き新聞業界でいくつかの役職を引き受けていた。情報通であったウォルターは、ドイツへの視察旅行の後、やがて戦争が来ることは避けられないことと備えて、彼らはロンドンから離れた田舎に住むことにした。そこで、彼らにとってふさわしい住まいを田舎に探すことになった。

1937年にウォルターとマージェリーは、住まいの候補をロンドンから南のサマーセット州の Yeovil の近くのイースト・ラムブロック East Lambrook 村に探しあてた。2度の下見のあと、1937年に、彼らは East Lambrook 村にある古い農家を購入した。このとき、マージェリーは46歳であった。このイースト・ラムブロック・マナー East Lambrook Manor と呼ばれる農家は、およそ15世紀までそのルーツをさかのぼることのできるサマーセット州の伝統的なスタイルの古い農家であり、庭園を作ることのできる約2エーカーほどの敷地があった。彼らが住む家 The House の他に、牛小屋 Cowhouse と、サマーセット産のりんご果汁を発酵させて酒（シードル）を醸造するための施設としてつくられたモルトハウス Malthouse が敷地にはあった。牛小屋と

モルトハウスは、L字型を形作るように配置されていた(図4参照)。家と牛小屋・モルトハウスの間には、バートン Barton と呼ばれる中庭があった。バートンはサマーセット州の農家独特の中庭の呼称であり、りんご酒(シードル)作りのために大量にりんごを絞るなどといった季節ごとの農作業を行うためのスペースであった。

初めは、フィッシュ夫妻がその家に住むためには大規模な修復が必要なほど家も庭園も荒れている状態であった。引っ越し直後の1937年には、家屋の修復に専念して夫妻の住まいを快適にした。2エーカーあまりの敷地のガーデニングに取り組んだのは、1938年になってからであった。ここに引っ越してくるまで、彼ら夫妻はロンドンの都会暮らしの生活に慣れており、田舎でのガーデニングには初めて取り組む素人であった。この古い家であるマナーハウスに引っ越してきて以来、フィッシュ夫妻はともにアマチュアとして初めて真剣にガーデニングに励むことになった。

夫妻の異なる理想の庭園像とマージェリーの庭園著述家としてのキャリア

ウォルターとマージェリー夫妻は、1937年に二人の終の住処となるホームを手に入れたが、彼ら二人は、次章で紹介するように、それぞれ異なった理想の庭園像を持っていた。『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956)には、彼らの異なった理想の庭園像を彼らのホームにどのように実現するのかというプロセスが描かれる。夫妻の間のガーデニングをめぐる摩擦も、マージェリーの視点から語られる。

最終的には、ウォルターが1947年に亡くなってから、マージェリーが理想とする庭園を、その後の人生において一人で実現した。彼女の庭園著述家としてのキャリアは、このプロセスを夫ウォルターの思い出とともに描いた『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956)からはじまった。この書は、当時の英国で、ベストセラーとなった。

その後、マージェリーは、生涯にわたって自らのガーデニングの実践から得た知見について *Amateur Gardening* などの庭園雑誌に寄稿しつつ、さらに『毎日の花 *A Flower for Every Day*』(1958)、『コテージ・ガーデンの花々 *Cottage Garden Flowers*』(1961)、『地被植物 *Ground Cover Plants*』(1963)、『日陰のガーデニング *Gardening in the Shade*』(1964)、『年間を通じての庭園 *An All the Year Garden*』(1966)、『手間のかからないお気楽ガーデニング *Carefree Gardening*』(1966)、『粘土質と石灰質の土壌にふさわしいガーデニング *Gardening on Clay and Lime*』(1970)の7冊の著作を数年おきに次々と刊行した。マージェリーの庭園についての本は、彼女のホームでの日々のガーデニングの実践経験から得られた失敗と成功の知見をユーモラスに語っている。ハウクロフト(2014)は、マージェリーの庭園についての著作は「庭園マニュアルといえ(擬似)科学的な記述が主流であった1960年代においては、・・・音楽界でビートルズが成し遂げたことと同等ぐらいに革命的」(Howcroft, 2014)であったと評価する。

マージェリーは、1963年に王立園芸協会 *Royal Horticultural Society* から著作や講義・オープンガーデンなどを通じて園芸界へ多大な貢献をしたことをたたえてヴィーチ記念メダル銀賞 *a silver Veitch Memorial Medal* を受賞した。この賞の名称となっているヴィーチは、日本開国直

後の1860年代に、耐寒性のある常緑樹などの観賞植物を日本から英国へ輸入して成功をおさめた園芸商である (Tachibana, 2000; 2004など)。

Ⅲ. 『私たちは庭を造った *We made a garden*』 (1956) を読む

『私たちは庭を造った *We made a garden*』 (1956) の初版は、「著者の庭園の全体像 ‘A general view of the author’s garden’ (by J. E. Downward)」と題する写真が表紙を飾っている (図1参照)。これは、牛小屋の手前にあるロック・ガーデンのスタイルの日時計の庭園を前景に、砂利の敷かれたバートン (中庭) を挟んで、家を遠景に見た構図となっている。家の前には広い芝生のスペースがあり、緑の芝生は刈り込まれていて美しく整えられている。芝生の一角には、斑入りのシカモア *sycamore* (*Acer pseudoplatanus variegatum*) の木が植えられていて、葉がこんもりと茂っている。家の玄関前には、低い生垣がつくられ、コテージ・ガーデンのように自然風なインフォーマルな植栽がされているのが見える。家の壁面は、Hamstone と呼ばれるサマーセット原産の明るい黄土色の石を使用している。マージェリーは家の壁面に、藤を這わせた。これは、小綺麗な (neat) ガーデニングを好むウォルターが生きていた時代には許されなかったことであった。

裏表紙にはマージェリーのポートレートが掲げられる (図2参照)。マージェリーは、家とその手前に広がる芝生とシカモアの木を背景に、本を広げて手に持ってバートンの砂利道のドライブに笑顔で立っている。図3の写真は、現在はカフェになっているモルトハウスの壁面に飾られていた。モルトハウス・カフェの壁には、庭園の歴史が写真とともに解説展示されている。この写真は、表紙と裏表紙の写真が撮られたのと同じ場所で1937年頃に撮影されている。夫妻がガーデニングに取り組む前の状態を示す。『私たちは庭を造った *We made a garden*』 (1956) の表紙と裏表紙の写真に描かれている庭園を、1938年から、はじめは夫妻で、ウォルターが1947年に亡くなった後はマージェリーひとりで、合計20年近くかけて作りあげた成果である。

East Lambrook Manor の敷地の環境は、土地の高低の微地形によって多様であった。日あたりの良いところと日陰になるところ。乾燥したところと湿気のあるところ。水の流れる溝。粘土質の土壌と石灰質の土壌。これらの特徴を持つ2エーカーあまりの土地をいくつかの区画に分けて彼らは庭園を造った。大きく分けると、バートンがあり家の前の芝生が広がるフロント・ガーデンと家の西側とモルトハウスと牛小屋の後ろ (西側) に広がるバックガーデンに分かれる。

図4を見ると、フロント・ガーデンには、芝生 the lawn、芝生と外の道路の間の塀に作ったボーダー花壇 the wall border、門から入って右手にあるロック・ガーデン the rock garden、牛小屋の手前にある日時計の庭 the sundial garden、東側に緑の庭 The Green Garden などがある。一方バック・ガーデンには、サマーハウス the Summer House の脇の細い小道から入る。はじめに高低差を生かしたテラス・ガーデン Terrace Garden 敷地の一番南には、シルバー・ガーデン Silver Garden、テラスガーデンの上 (西側) には南からホワイト・ガーデン the White Garden、上の芝生 the Top Lawn、その間の東西の小径に沿って植えられたマージェリーがプディング・ツリー

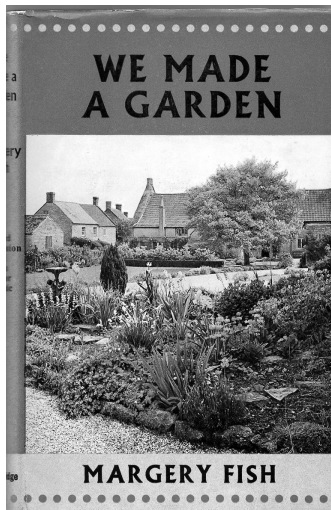


図1 『私たちは庭を造った We made a garden』(1956)の表紙:「著者の庭園の全体像 'A general view of the author's garden' (by J. E. Downward)」と題する写真

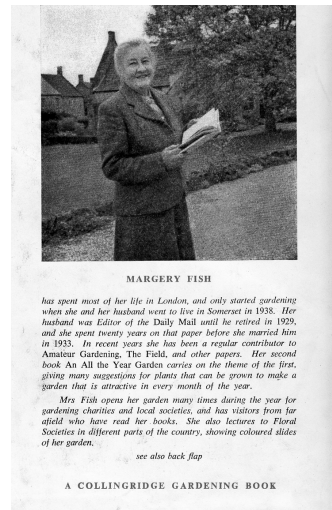


図2 『私たちは庭を造った We made a garden』(1956)の裏表紙に掲げられるマージェリーのポートレート



図3 1937年頃に撮影された Barton から見たイースト・ラムブロック・マナー East Lambrook Manor の家。庭園が造られる前の状態である。(出典: East Lambrook Manor Malthouse Café 蔵)

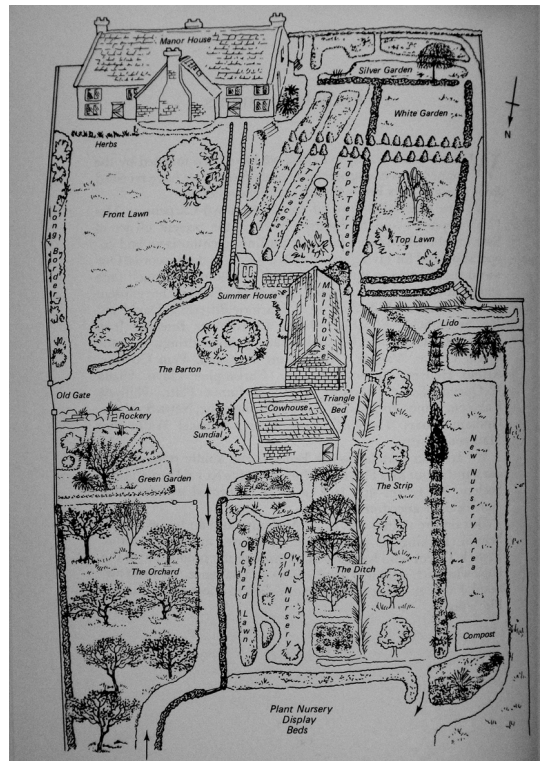


図4 East Lambrook Manor の庭園プラン
(出典: Chivers and Woloszynska, 1990: .vi)

と呼んだトピアリーの列、それからモルトハウスの裏側には、リド Lido と呼ばれる水の流れる日陰の湿地の一角がある。牛小屋の裏から西側から帯状に、ストライプ The Strip、溝 The Ditch、古い種苗園 The Old Nursery（現在は、2月以降満開を迎えるクリスマスローズとスノードロップの森 Wooded Helleborus & Snowdrop Garden）、小道を挟んで東側にりんごなどの果樹園 The Orchard が広がる。マージェリーは、よい庭園を作るためには、植物の状態に気を配ることも大切であるが、庭園の空間構成として、土地の微地形による環境にかなうような良い骨格をつくるのが大切であると主張する。

『私たちは庭を造った *We made a garden*』（1956）は、以下の24章からなる。この24章の内容を簡単に紹介する。

イントロダクション Introduction では、1937年に East Lambrook Manor の家を見つけるまでの話が語られる。

1 家 The House では、古い家と庭園とはお互いに一体になって進まなくてはならず、それができる唯一の方法は、その家に住んで生活しながらガーデニングをすること。急がずに、そこに生活しながら考えるとどのような庭がふさわしいのかおのずと見えてくると語る：

You can't make a garden in a hurry, particularly one belonging to an old house. House and garden must look as if they had grown up together and the only way to do this is to live in the house, get the feel of it, and then by degrees the idea of the garden will grow.

そのために、家に住むことが、重要であり、彼らは、そこに住めるように修復した。

2 庭園 The Garden では、庭の全体の構想について語られる。はじめは、庭の敷地から出る、岩や石、ゴミなどを取り除く掃除から手をつけた。フィッシュ夫妻は、手伝いのガーデン・ボーイをひとり雇った。庭については、すでに前からあったロック・ガーデンを整え、高山植物を植えることを始めた。

3 芝生 The Lawn では、芝生の種を蒔き、芝生をつくる過程が語られる。芝生を作るには、排水など土壌も整えねばならず、試行錯誤であった。

4 小径をつくる Making Paths では、どのように小径をレイアウトするのかが語られる。まっすぐの道ではなく、微地形にあったカーブを描く小径をレイアウトした。

5 服を着せる Clothing では、壁に沿って植栽して、植物による服を壁に着せて、ボーダー花壇を作る過程が語られる。

6 生垣 Hedges では、イトスギの *Cupressus macrocarpa* で、生垣を作ったことが語られる。これは13年経って元気が無くなったので、1951年からは、ロニセラ *Lonicera nitida* の生垣をつくり始めたと語る。

7 テラス・ガーデン The Terraced Garden では、芝生の次に大きな面積を占める家の西に土地の小さな高低差を生かしてつくったテラス・ガーデンについて語る。この7章までは、ほぼ時系列にどのように庭園をつくったのかが語られるが、彼らの間にはこの1年間に自然と役

割分担当ができていたと語る。ウォルターは、芝生、小径、塀、生垣の世話、マージェリーは花々の世話と全体の細々とした片付けの担当であった。テラスのレイアウトは、カーブを描き、イレギュラーなかたちをとりフォーマル過ぎないように気を配った。マージェリーは、何か素朴でコテージのようなスタイルが、家に合うような庭であると考えた。

8 植える **Planting** では、はじめの1年間にマージェリーが夫ウォルターから学んだことが語られる。ウォルターもガーデニングは実際には初めて経験するはずであるが、マージェリーは、ウォルターの想像以上の豊富な知識とアイデアに敬意を払うこととなった。マージェリーは、家事と地域の社交とガーデニングとの板挟みで多忙な生活であったが、ウォルターはマージェリーに適切な時になすべき事をするようにと時間の使い方に厳しかった。庭園については、常に全体像とのバランスで、プロポーションを考えて、庭園の中の細部や、ある特定の植物にこだわり過ぎないようにと、ウォルターは、常にマージェリーにアドバイスをした。ウォルターは、不必要な気晴らしは避けるようにと言い、どこもきちんとして整然 (*neat*) としておく事を望んだ。ウォルターの生きている頃は、小径と植物との間は整然と分けられており、植物が小径へとはみ出している事はなかった。ウォルターが亡くなってからは、マージェリーは、小径と植物との間を分け隔てているラインをほかすために、つる性の植物が小径へはみ出すようにあえて植えていると述べる。インフォーマルなコテージ・ガーデン・スタイルの植栽は、時にはウォルターの望む整然さとは合致しなかった。

9 支柱する **Staking** 支柱を立てる時期を見極める事は難しかった。マージェリーは、なるべく自然にこんもりと植物がなびくように植栽したいが、うまく支柱で支えないと、風に倒れてしまう。ウォルターは、しっかりした支柱が必要だとアドバイスした。現在 (1956年) は、メタル製の支柱を、マージェリーが地元の鍛冶屋に注文して使用していると語る。

10 ナイフでガーデニング **Gardening with a Knife** ウォルターは、「庭に散歩に行くならば、鋏を持っていくとよりいいよ」と必ず、マージェリーに言う。マージェリーは、剪定ばさみを持って散歩に行った。ウォルターは、庭に状態の良くない植物があるのを嫌い、植物の状態が良くないと、引き抜いたり、ナイフで切ってしまう。ウォルターはある高名な貴族の庭では、ヴィオラの花は、花がら摘みが徹底的に行われて、死んだ花は、一つも見られないと述べ、家でも実践するようにとマージェリーにいう。しかしながら、マージェリーは、この点でも熱心ではなかった。種を取るために、あえて花を残すということをしている友人もいると紹介する。いっぽう、賢明な剪定 (*judicious cutting*) は、ボーダー花壇をコントロールするためには有効であるという。例えばアスター (*Michaelmas daisies*) の群落を2回開花させるために、群落を2つのグループに分ける。まず1つのグループを5月に6インチほどに剪定すると、そのグループは数週間ほど開花が遅れるので、もう一方のグループが開花した後に、遅れて後に開花させることができる。このようにすると花の時期を長く楽しむことができるとテクニックについて語る。

11 水やり **Watering** ウォルターは水やりにも強いこだわりがあった。水やりは、ボーダー花壇には、植物が根から水を吸いやすいように根に向けてしっかりとやらなくてはならない。

芝生には、スプリンクラーでも良い。また、太陽の照っている時の水やりはいけない。

12 ダリア Dahlias ウォルターは、バラとクレマチスに加えて、ダリアを好み、非常に情熱を持って育てていた。ダリアの開花後、来年に向けてのメンテナンスとして、地下茎の掘り上げの労力が語られる。

13 いくつかの失敗 Some Failures ウォルターは、華やかな花々、デルフィニウムやルピナスなどの花々を植えることをマージェリーに望んだ。デルフィニウム的一种 *Delphinium nudicaule* を育てている時のことであった。ようやく蕾が出来て、マージェリーは開花を楽しみにしていた。しかしながら、ある日、蕾がナイフで全て切り取られてしまったことを発見した。それは、ウォルターが、蕾がとても大きかったので種ができているのだと勘違いして蕾を全て切り取ってしまったのだという、ウォルターの失敗のエピソードがユーモアを持って語られる。また粘土質の土壌のため、根が十分に張ることができずに、うまく育たなかった植物についても語られる。

14 堆肥造り Composting 敷地の大部分は、粘土質の土壌のために彼らは、困り果てていた。この章では、どのように堆肥作りをして、土を入れ替えて、土壌改良したかが語られる。

15 常緑樹の価値 The Value of Evergreens 第二次世界大戦開戦後の1939年9月にウォルターは報道検閲の仕事でしばらくロンドンに住むことになり、家を賃貸に出した。マージェリーも秘書としてロンドンへ同行した。戻ってきたのは1940年6月であった。賃貸に出したテナントは、戦争中のため忙しく、芝刈りなどの基本的なガーデニングは行ってくれたが、植物が管理されずに育ちすぎて藪になって、荒れはててしまった。伸び放題になってしまった生垣の常緑樹をきちんと手入れすると、ようやく、彼らの庭園らしくなった。



図5 テラス・ガーデン。ブディング・ツリーとマージェリーが呼ぶトビアリーと石畳の小道が続く。(2016年7月筆者撮影)



図6 モルトハウスの裏側、敷地の一番西側にあるLidoと呼ばれる水の流れる湿地。湿地と日陰を好むシダ植物からなるロック・ガーデンをかたち作る。(2016年7月筆者撮影)

16 私たちの犯した過ち We made Mistakes 庭園の眺めをよくしたいと、水仙の球根を果樹園やフィールドまで植えた。しかし放牧された牛がそこまで来て、それらの新芽を食べてしまった。溝の庭園では、カノコソウ *valerian* を沼地のへりに植えたが、沼に消えてなくなってしまったなど失敗のエピソードが語られる。

17 ウォーター・ガーデン The Water Garden もともと溝の庭 the Ditch garden には、水が豊富であった。モルトハウスの裏にある水の流れは、もともとはあわせて購入した隣の家の敷地との境界線だった。粘土質をのぞいて、土壌改善して水辺にふさわしいピートの庭 a *peat garden* を作ることに専念した。そこにはプリムラを植えた。水辺にふさわしい柳の木を植え、プリムラ、菖蒲 *Iris kaempferi* などを植えた。

18 ロック・ガーデン Rock Gardening ロック・ガーデンとは、英国で、ヴィクトリア時代・エドワード時代にはやったガーデニングの手法である（橘，2006など）。ロック・ガーデンは、岩石と高山植物との組み合わせで、いろいろなスケールのミニチュアの風景を創り出すことができる。フィッシュ夫妻も、門の右手のロック・ガーデンをはじめ、庭園の中の随所で、岩石と高山植物を組み合わせ、大小のスケールのロック・ガーデンの風景をつくりだしている。

19 石畳のガーデン The Paved Garden 彼らは、ガーデンの中の小径を敷地の中で取れた岩石やサマーセット特有の *Hamstone* を敷き詰めて石畳をつくった。この石畳の小径には匍匐するタイプのタイムなど、石畳の上にはみ出しても見栄えのする植物を植えた。

20 ハーブ・ガーデン The Herb Garden マージェリーは、「かつての古い世界の植物のオアシス」としてハーブ・ガーデンをつくる楽しさを語る。庭園では、ハーブ類は、生垣として仕立てることもできる。料理には欠かせないとして、マージェリーは、順番に、パセリ、チャイブ、セージ、タラゴン、ローズマリー、ホースラデッシュ、ミント、ベルガモットなどの伝統的な使用法や効能について語る。

21 早いと遅い（季節）Early and Late ウォルターは、冬の庭園には全く興味を持たなかったと、マージェリーは語る。ウォルターが活着している間は、季節外れの冬の植物は植えることが許されなかったと語る。この章では、ウォルターが亡くなった後に、マージェリーが発見した季節外れの植物を植えることの楽しさについて語っている。

22 混合ボーダー Mixed Borders この章では、植物を混植させることによって生まれる調和の美しさについてマージェリーの視点から語っている。

23 何を植えようか？ What Shall I Plant? マージェリーは、どのような植物を選んで庭に植えるのかについて語る。ウォルターは、よく育つ植物 *well-grown plants* が重要であるといい、



図7 芝生から家を望む。シカモアの木が成長している。(2016年7月筆者撮影)

マージェリー自身は年間を通して花を見たいと考えている。この2つの基準で花を選んできたと語る。マージェリーは支えがなくても自立し、できるだけ長く花を咲かせてくれる植物を選んで紹介する。

24 生きることと学ぶこと Living and Learning マージェリーは、ガーデニングを通して、いつでも新しい考えを学んでいると語る。ガーデニングには、終わりということがなく、絶えず、やり続け、絶えず、何か発見するような、人生のようなものであるとマージェリーは語る。

IV. ウォルターの理想とする庭園像の系譜

マージェリーの著作では、ウォルターの理想とする庭園は、小綺麗に整えられた芝生が広がり、鮮やかな色のダリアなどの草花からなる庭園だと語られる。このような庭園像は、ウォルターだけが独自に追求していたガーデニングのスタイルではなく、同時代の多くの人々が同じように理想としていた。19世紀終盤以降20世紀初めに、英国で鉄道路線が拡大されるにつれ、組織的に開発された郊外住宅に付随する庭園が目指した理想像とウォルターの庭園像はつながると考えられる。この庭園像は、ロンドンの地下鉄などの鉄道会社の宣伝ポスターの図像に刻印されている。ロンドン鉄道博物館に所蔵される2つのポスターに描かれる郊外住宅の庭園とガーデニングする人々の図像をみてみよう。

まず、ロンドン北部に開発された郊外住宅地「ゴルダーズ・グリーン Golders Green」は、1908年に地下鉄の駅が開業されたことにより住宅地として発展した。1908年につくられた地下鉄のポスターには、アーツ・アンド・クラフツのスタイルの家が描かれる(図8)。その家の前には、緑の芝生が美しいガーデンが描かれている。芝生の上では、戸外用の椅子にゆったりと座った



図8 地下鉄のポスター「ゴルダーズ・グリーン Golders Green」1908年、作者不詳 (Bownes and Green, 2008: 112)

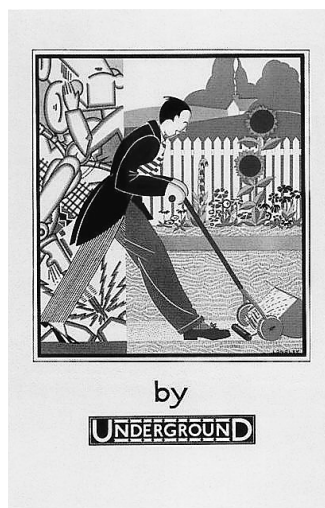


図9 地下鉄のポスター「地下鉄によるガーデニング Gardening by Underground」1933年、Stanislaus Longleyによるデザイン (Bownes and Green, 2008: 125)

母親が編み物をしていて、そのそばで子どもが芝生の上で毛糸をもって手伝っている姿が中央に描かれている。花壇にはひまわりなどの鮮やかな花々が植えられており、男性が花壇の世話をしている姿がポスターには描かれる。花壇の世話をする男性は、明らかにこの家に住む主人であり、雇われたプロの庭師ではない。男性は、この家に住む主人としてガーデンの世話を楽しんで誇らしげに行っている様子がわかる。ポスターの見出しには、上に特徴のある飾り文字で「地下鉄 UNDERGROUND」と描かれ、下に「ゴルダーズ・グリーン Golders Green」と開業した地下鉄の駅名と住宅地の名前が描かれる。さらにその下に「愉快的展望をもてる場所 A Place of Delightful Prospects」と描かれる。Bownes and Green は、1908年は、新聞社の Daily Mail 社が主催する最初の「デイリーメール社の理想のホーム博覧会 Daily Mail Ideal Home Exhibition」が行われた年であり、ホームをめぐる調度品のデザインの良さや アーツ・アンド・クラフツの価値が再認識された時代潮流がこのポスターのデザインの中に描きこまれていると指摘する (Bownes and Green, 2008: 112)。

次に Stanislaus S. Longley が1933年にデザインした「地下鉄によるガーデニング Gardening by Underground」と題するポスターを見てみよう (図9)。これは1933年のモダニズムのデザインで、会社勤めの男性の横向きの身体が左右で2つの世界に分離しているように描かれている。左側は全体の3分の1の割合で、都市での労働にまつわる混雑や喧騒、騒音などを連想させ背景が灰色一色で描かれている。それに対して、全体の3分の2の割合の右側は、鮮やかな色がついている世界で、柵で囲まれた郊外住宅のガーデンで、緑に描かれた芝生の上を芝刈り機を使用してガーデニングをしている男性の身体が描かれている。右側の世界は、白い木製の塀によって、手前に描かれるガーデンと向こう側に描かれるなだらかな丘陵が広がるカントリーサイドの風景に隔たれている。塀の手前のガーデンの側には花壇があり、ひまわり、プリムラ、撫子、ツリガネソウなどの色鮮やかな草花が植えられている。塀の向こうのカントリーサイドには、煮炊きや暖炉などの生活にまつわるけむりが煙突からたちのぼる小さなコテージも牧歌的に描かれている。地下鉄による通勤によって、毎朝、都心に地下鉄で向かい昼間は都市の喧騒の中オフィスで働き、仕事後に再び地下鉄に乗って郊外住宅に帰宅する。帰宅後は、自宅の庭でガーデニングをするなどそれぞれのレクリエーションに励むといった勤め人のライフスタイルが可能になった。この鉄道広告のポスターは郊外住宅でのこのような生活に憧れる人々の気持ちを掻き立てている。さらに Bownes and Green は、1916年に英国では、サマータイム制が導入され、夏季には都心にある会社から、地下鉄に乗って郊外住宅に1時間早く帰宅して、夏の明るい長い夕方をガーデニングなどのレクリエーションをして過ごす時間が多く取れるように英国人のライフスタイルが変化したと述べる (Bownes and Green, 2008: 125)。

鉄道の敷設によって発展した郊外住宅をテーマとした1908年と1933年に発表された2つの広告ポスターでは、小綺麗に整った芝生のガーデニングがともに中心に描かれている。芝生のガーデニングは、郊外のホームの幸福な暮らしの象徴とさえいえるほどである。このような、芝生に対する憧れと共感を、新聞社デイリー・メールのエディターを長く務めていたウォルターは内面化させていたのではないだろうか。

V. おわりに

ホームの文化地理学をジェンダーから考えると、ガーデニングは男性の活躍の場として議論されている (Blunt, 2006)。英国の地理学者アリソン・ブランドが編集した『ホーム *Home*』(2006)では、特に郊外住宅が形成される過程において、男性は家庭のなかの handy-men として、ホームのなかの屋外空間に活躍の場があったと論じられている。ホームの中では、女性はキッチンでの料理や部屋の掃除機がけなどの掃除、男性は屋外の芝刈りなどのガーデニングに分業されてきたと指摘される (Blunt, 2006)。

フロント・ガーデンの芝生の芝刈りの管理がよくなされていることが良きホームのしるしであった。ウォルターが美しく刈り込まれた緑の芝生と鮮やかな花色のダリアなどの植物からなる花壇を愛好したことは、ガーデニングにおける男性性の現れであると分析することができるのではないだろうか。

次に、フェミニストの視点からの評価をみてみよう。ウォルターとマージェリーの関係は、職場での上下関係が結婚してからも続き、彼らのホームのガーデニングにおいてもウォルターがボスであり、マージェリーが部下という関係として描かれていると、『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956)を含む庭園についてのアンソロジーを編んだ Rogers は解説している (Rogers, 2011)。高齢によってウォルターが衰えて、彼は自ら身体を動かしてガーデニングができなくなってからも、ウォルターはマージェリーに対してガーデニングの仕事を細かく言いつけて、その内容がごまかすことなく正しく適切になされているのか実際に監視するという状況がマージェリーによって語られている。

Cooke (2013) は、フェミニストの観点から1950年代に活躍する先駆的女性10人を取り上げて紹介している。その中にマージェリーも取り上げられている。Cooke は、『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956) は、マージェリーのウォルターへの積年の恨みが果たされる「ガーデナーの復讐」として読めると指摘する (Cooke, 2013)。

マージェリーとウォルターは、シシングハーストのヴィタ・サックヴィル・ウエストとハロルド・ニコルソン夫妻のように、両者がお互いに平等な関係のパートナーシップとして描かれていないと Rogers は指摘する (Rogers, 2011)。

しかしながら、それは、マージェリーの率直な語りを通して指摘できる解釈である。ウォルターの口からは、彼らのガーデニングについて何も語られてはいない。『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956) という著書のタイトルが示すように、庭園を造った主体は、we = マージェリーとウォルターである。いかに二人の間の摩擦が語られようとも、二人 (we) で創造した庭園として語られる。さらに、マージェリーが出版社に初めに示唆したタイトルは、結果としては採用されなかったが『ウォルターとともにガーデニングする *Gardening with Walter*』であったと彼女によって語られている。『私たちは庭を造った *We made a garden*』(1956) は、マージェリーによる亡くなった夫への追憶の書であり、夫とともに (with) ガーデニングを勤勉に行って過ごした思い出の日々のプロセスを彼女が率直に彼の細かすぎる頑固な扱いにくい性格をもユーモアを持って語っているとも読めるのではないだろうか。マージェリーは、夫とともに

1950年代に活躍した英国人著述家マージェリー・フィッシュによる庭園の語りから試みるホームとジェンダーをめぐる庭園の文化地理学

に勤勉な試行錯誤のガーデニングに取り組んだ。マージェリーは、これらのガーデニングのトレーニングの日々をユーモラスに書くことで乗り越えて、彼女は当時の英国で広く共感を得る人気の庭園著述家となった。とくに、勤勉なアマチュア・ガーデナーのマージェリーが提唱する「手間のかからないガーデニング Carefree Gardening」(Fish, 1966) からなるコテージ・ガーデン・スタイルの考え方は広く共感を得た。

付記

本研究は、科学研究費補助金（課題番号26370938, 26284132）による成果の一部である。

文献

- Blunt, Alison and Dowling, Robyn (2006) *Home*. Routledge.
- Bownes, David and Green, Oliver (2008) *London Transport Posters: A Century of Art and Design*. London Transport Museum. Lund Humphries.
- Cable, Jim ‘Margery Fish was the doyenne of cottage garden style in the 1950s and 60s. Her garden in Somerset remains as a testament to her carefree style of gardening.’ *Gardian* 20 June 2015 <https://www.theguardian.com/lifeandstyle/2015/jun/20/margery-fish-cottage-garden-somerset> 最終閲覧日2016年10月20日
- Chivers, Susan, and Woloszynska, Suzanne (1990) *The Cottage Garden: Margery Fish at East Lambrook Manor*. John Murray.London.
- Clark, Timothy (2000 (初版は 1989)) *Margery Fish: Country Gardening*. Garden Art Press.
- Cooke, Rachel (2013) ‘In the Garden with Margery Fish,’ in Cooke, Rachel (2013) *Her Brilliant Career: Ten Extraordinary Women of the Fifties*. Virago Press.
- Fish, Margery (1956) *We Made A Garden*. Collingridge.
- Fish, Margery (1958) *A Flower for Every Day*.
- Fish, Margery (1961) *Cottage Garden Flowers*.
- Fish, Margery (1963) *Ground Cover Plants*.
- Fish, Margery (1964) *Gardening in the Shade*.
- Fish, Margery (1966) *An All the Year Garden*.
- Fish, Margery (1966) *Carefree Gardening*. Faber and Faber Limited.
- Fish, Margery (1970) *Gardening on Clay and Lime*.
- Howcroft, Heidi (2014) *First Ladies of Gardening: Pioneers, Designers and Dreamers*. Frances Lincoln Limited Publishers.
- Horwood, Catherine ‘Margery Fish’, *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford University Press.
- Horwood, Catherine (2010) *Women and their Gardens: A History from the Elizabethan Era to Today*. Ball Publishing. Chicago.
- Robinson, William (1870) *Wild Garden*. John Murray.
- Rogers, Elizabeth Barlow (2011) *Writing the Garden: A Literary Conversation Across Two Centuries*. Alison & Busby Limited.
- Tachibana, Setsu; Daniels, Stephen and Watkins, Charles (2004) ‘Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation’ *Journal of Historical Geography* 30-2 (364-394).
- Tachibana, Setsu (2000) *Travel, plants, and cross-cultural landscapes: British Representation of Japan, 1860-1914*. Unpublished PhD thesis, University of Nottingham.
- East Lambrook Manor: The home of English Cottage Gardening <http://www.eastlambrook.com> 最終閲覧日2016年

10月18日

- トマス, キース (1989) 『人間と自然界：近代イギリスにおける自然観の変遷』法政大学出版局
- クワイニー, アンソニー (1995) 『ハウスの歴史・ホームの物語：イギリス住宅の原形とスタイル上下』住まいの図書館出版局
- 橘セツ (2006) 「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」『神戸山手大学紀要』 8号 (89-104)
- 橘セツ (2009) 「庭園のなかの野生と異文化：ウィリアム・ロビンソン『ワイルド・ガーデン』(1870) の思想と実践について」『神戸山手大学紀要』 11号 (141-156)